



戦争なんか **大**キライ 2

ちいき
地域にみる滋賀県民の戦争体験

はじめに

いまみなさんが暮らしているまちは、とても平和です。

でも、60年ほど前は、とても平和だったとはいえませんでした。それは日本が戦争をしていたからです。

その戦争で亡くなった人は、滋賀県だけで3万2千人以上にのぼります。十分な食べものやクスリがなかったために亡くなった赤ちゃんや、電車に乗っていて戦闘機がうった弾にあたって死んだ人はふくまずにこれだけの人数になるのです。

数え切れない悲しみをのこして、戦争は終わりました。そのとき子どもだった人たちは、戦争はもうコリゴリだ、もう戦争なんかしたくないと思いました。それはとても強い思いでした。

そうしたあのときの気持ちを大切に、わすれないようにしなければならないと考え、戦争に関するいろいろな資料を集めたり、お話を記録したりしています。そして滋賀県では、それをもとに世界の平和をねがう施設、平和祈念館をつくることにしています。

この本は、戦争中に私たちの地域で起きたいろいろなできごとをまとめたものです。もちろんこの本に書いていない、たくさんのできごとがありました。

もしみなさんが、いま自分が暮らす地域と戦争とのかかわりについて興味があれば、この本を参考にして、ぜひ調べてみてください。またこの本を読んでみて感じたことや、わからないことがあったら、お手紙やEメールをくださいね。

平和祈念館はまだ仮の名前です。

もくじ

ばくだん池のカエル	P2.3
P4.5	悲しい夏休み
消えた飛行場	P6.7
P8.9	プラットフォームは知っている
みんなの願い	P10.11
P12.13	ミスタータナカ、クリスマスは母国でむかえるよ
学校の授業がなくなった	P14.15
P16.17	山のなかの大きなあな
にがいどんぐりパン	P18.19
P20.21	終わりが始まりだった！
滋賀県と戦争<地図> 空襲の被害(昭和20年)	P22.23
P24.25	さがしてみよう、滋賀県の戦争のこと さがしてみよう！キミたちの地域と戦争のことを



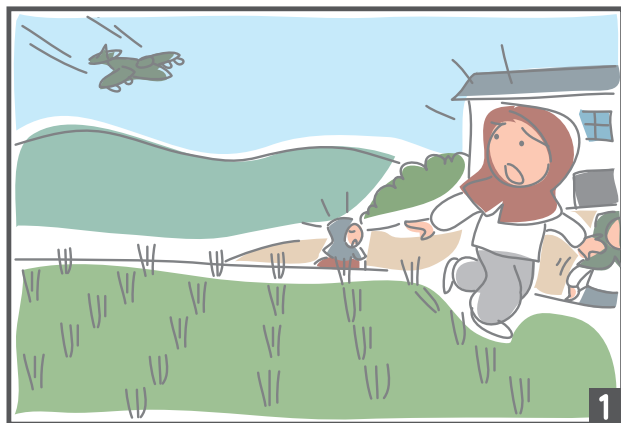
ばくだん池のカエル

●「田んぼのあな」のその後

昭和20年6月、彦根市の城南小学校（当時は福満国民学校）が爆撃されました。いくつかの爆弾は学校の近くの田んぼに落ち、そこには大きなあながあきました。

そのあなは戦争が終わっても残っていました。そこにはやがて水がたまり、カエルや魚が住む池になりました。その池は「ばくだん池」とよばれました。

「ばくだん池」で遊ぶ子どもがいる一方で、「ばくだん池」へは決して近づかない子どもがいました。



60年ほど前の戦争で、日本の多くの地域は、空から爆弾を落とされたり機関銃で攻撃されたりする空襲を受けた。大きな爆弾を落とされたところには大きなあながあいた。そこに雨水がたまって、日本のいろいろなところに「ばくだん池」ができた。とくに、東京、名古屋、大阪などの大都市は、大きな爆弾がたくさん落とされたから、大きなあながたくさんあいた。まるで月面のクレーターみたいだったという人もいる。いまでも沖縄の斎場御嶽（セーファウタキ）には、「ばくだん池」が残っている。

戦争が終わって、「ばくだん池」では、子どもたちが水遊びをしたりつりをしたり楽しく遊んだけれど、どうしてこの池ができたのかということを考えてほしい。そして、「ばくだん池」ができたまわりでは、多くの人が亡くなったり、ケガをしたりしたことも覚えておいてほしい。

いま日本で、「ばくだん池」を見つけることはとても難しいけれど、ようやく戦争が終わった国やいまも戦争が続いている国には、爆弾が落とされてできたあなや「ばくだん池」があるかもしれない。そして、地面にだけでなく、旧ユーゴスラビアやアフガニスタンの子どもたちの心にも、ぽっかりと大きなあながあいているんじゃないかな。

福満国民学校5年生の杉本功仁子さん。

爆撃があったとき、功仁子さんは家にいた。お父さんとお母さんは田んぼに出かけていて、お姉さんと2人きりだった。爆風で窓ガラスがわれ、功仁子さんたちはとなりの家に逃げた。しばらくして、出かけた功仁子さんは、道で手当てを受けている人を目撃した。その人が亡くなったことを知ったのはそれからまもなくだったんだ。

いまは保育園が たっています

やがて小学校の近くの「ばくだん池」はうめ立てられた。いまは、「城南保育園」がたっているよ。ちょうど給食をつくっている「調理室」のあたりに「ばくだん池」があったそうだよ。



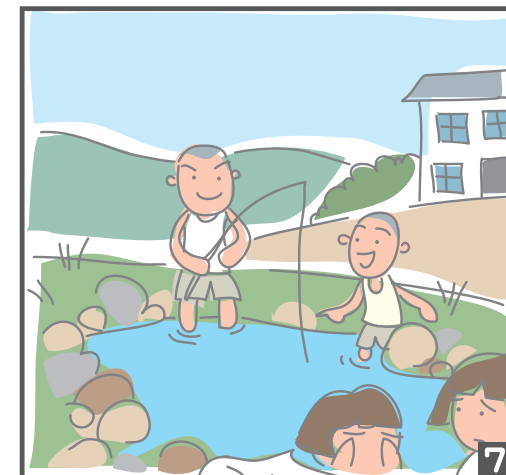
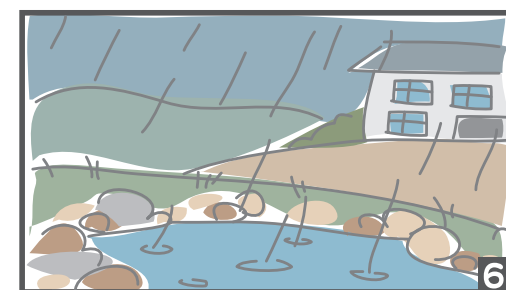
城南保育園 ▶



▲空襲で焼けた大阪のまちのようす。丸く見えるのが、爆弾でできたあな。



▲2001年10月、アメリカ軍機がアフガニスタンの首都カブールを空爆した。爆撃でできた大きなあなをのぞく人々。（ロイター＝共同通信社）



田んぼの赤ちゃん

犬上郡甲良町の北川とし子さんが、艦載機という船から飛んでくる小型の飛行機から、機関銃で攻撃された日のことを話してくれた。

「こうちゃんの家のやえちゃんがな、赤い服を着ていやったんや。その赤い服だけぬがせて乳母車においとかはったんや。その赤い服めがけて艦載機がおりてきよったんや。ほいでその赤い服にな、ダダダダ...と機銃掃射しよった。もう死ぬかと思った。ほいたらダーイと艦載機は行きよったでな。ふじちゃんと『よかったな』ゆうてたもん。」



大津市石山の東洋レーヨン滋賀工場（いまの東レ）では、戦争が激しくなると兵器の部品をつくっていました。戦争が終わる少し前、工場に1発の爆弾が落とされました。この爆撃で16人が亡くなり、13人が大ケガをしました。



御霊神社

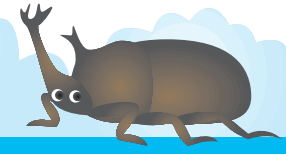
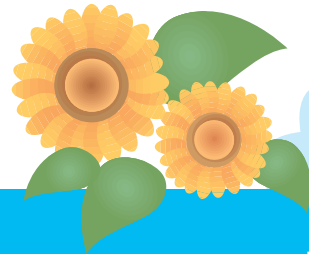
夜、ねられへんようになった

昭和20年、大津市の池田廣さんは瀬田工業学校（いまの瀬田工業高等学校）の4年生だった。このころ、いまの中学生以上の人たちは、学校で勉強することはほとんどなくなり、「勤労動員」といって工場などで働かなければならなかった。廣さんたちも、石山の東レの工場で働いていた。そして、16歳の誕生日をむかえる2日前、7月24日の朝8時ごろ、いつものように出勤してきた廣さんが、ちょうど東レの正門の前にある御霊神社にいたときのことだった。「爆弾が落ちる瞬間、ズザーッという音がして、ザーという、ドッカーンという音がし、しばらくすると砂がたくさんふってきました。神社の防空壕から出てみたら、血だらけの人がたくさんいて、もうみなさん半狂乱ですわ。その日から、私だけじゃなくて、ほかの同級生も、夜、ねられへんようになった。あくる日も出勤したんですが、すごくこわいんです。爆弾の落ちたあとを見たら、タタミ6畳くらいの大きなあながあいていました。」



アメリカ兵の白いスカーフ

大津市の大西礼子さんが「ほんとうにこわかった」と話してくれた忘れられないこと。「私たちがねらわれたのは艦載機でした。近くまで飛行機がよってきたことがあります。こわかったですね。ほんまにすぐ目の前に飛行機があったんですもの。アメリカ兵のパイロットが首にまいている白いスカーフがはっきり見えました。いまも目にやきついていて、しっかり覚えています。」



悲しい夏休み

神崎郡永源寺町には、『殉国碑』と刻まれた碑があります。永源寺町の山田みよさんは、「久司と忠男は、家のなかで、私の目の前で撃たれて死んだ。帰って来なかったらよかったんや。まるで、死ぬために家に帰って来よったようなもんや。」と、50年以上前の悲しいできごとを話してくれました。



「殉国碑」には、戦争で亡くなった地域の人の名前が刻まれている。そのなかに、2人の名前もある。



久司くんが3歳の時の写真。

バリバリバリッ

戦争が終わる2週間ほど前のことでした。7月30日午前8時ごろ、小学2年生の久司くんと3歳の弟の忠男くんは、近所の集会所にラジオ体操に出かけました。帰る途中、空襲を知らせるサイレンがなりました。2人が走って家にたどりついた直後のできごとでした。アメリカの戦闘機が急降下してきました。お母さんは「危ない、危ない、はよう家のなかに入り」とさげびました。2人が家のなかで転がりこむように入った時、バリバリバリッという音がして、久司くんと忠男くんはたおれました。忠男くんは即死でした。久司くんは、近所の方が病院まで連れて行く途中、亡くなりました。村の近くにいた兵隊さんが久司くんたちの家の近くの竹やぶにかくれ、その兵隊さんをねらった弾が2人にあたったのではないかといいことです。



戦争のとき、日本は空襲という空からの攻撃を受けた。木の家がなかった日本へ、アメリカ軍は、ものを焼きはらう焼夷弾という爆弾をたくさん落としました。大阪や神戸など大きなまちは一度に何百何千という焼夷弾が落とされて、家も学校も何もかも燃えてしまった。空襲によって、亡くなった人と行方がわからない人は約32万人。約920万人が住む家がなくなるなどの被害にあったといわれている。

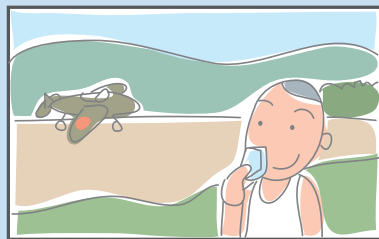
滋賀県では、戦争が終わる3カ月くらい前から、何度か空襲があって、40人以上が亡くなり、180人以上の人たちがケガをした。東レの空襲の時のように大きな爆弾が落とされることは少なかったけれど、機関銃で攻撃される機銃掃射がたびたびあった。機銃掃射にあった人たちはみんな、自分がねらわれているのがわかるから、「とてもこわかった」と話してくれました。パイロットの顔まで見えるくらい近づいてくる飛行機から攻撃されるのって本当にこわいと思うよ。

戦争は、遠い戦場だけのことでなくて、地域やそこで暮らす人たちも攻撃されるようになってくるものなんだ。つまり、どこにいても、だれであっても命をうばわれるおそれがある、それが戦争なんだ。それは日本だけのことでなくて、日本軍も、中国のまちを空襲したし、イギリスやドイツなどヨーロッパでも空襲はあった。また、日本の戦争は終わっても、世界から空襲はなくならなかった。最近では、旧ユーゴスラビアやアフガニスタンで爆弾が落とされたことを、みんなは知っているよね。いまでも空襲によって、大人も子どもも関係なく、亡くなったりケガをしたり、家をこわされたりする人たちがいる。どうしてそんなことが起こるのか、考えてみて。

飛行機をリサイクル

戦争が終わって、八日市飛行場のいろいろな施設はこわされ、多くの飛行機は燃やされた。それは、アメリカ軍によって行われたといわれている。

そのころ小学3年生だった山田利治さん。利治さんのおじいちゃんは、飛行機のタイヤでゴムぞうりをつくってくれた。飛行機のガラスは石でこするといいにおいがした。利治さんはそのガラスでペンダントをつくらしたりしたんだ。



●竹やぶのなかにトンネル発見？

八日市の布引丘陵の山すその道にそっていくと、竹やぶのなかに何やらコンクリートでできた物体が…。それは、戦時中、飛行機をかくすためにつくられた「掩体壕」。

戦争が終わるまで、八日市には飛行場がありました。戦争が始まると、多くの兵隊さんが、ここから戦場へと出発していったのです。飛行機で敵の船などに体当たりする特攻隊の訓練もありました。戦争が終わりに近づくとき空襲があり、八日市の人たちは不安な毎日を送っていたものでした。



▲ このおくの方に掩体壕がある。



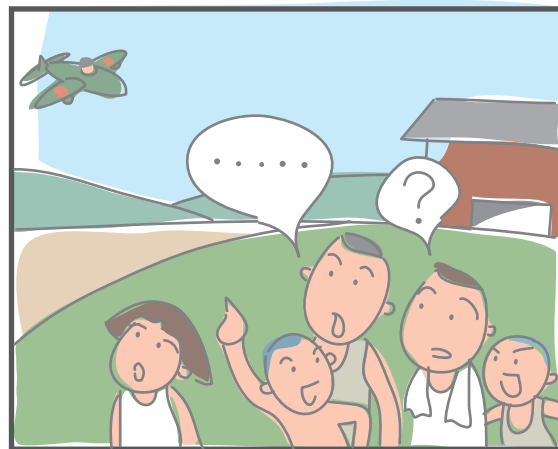
◀ 掩体壕へ飛行機を運ぶための道路もつくられた。そのため、大切な田んぼを提供しなければならない人々もいた。

消えた飛行場

●その人は、小さな飛行機に乗ってきた

昭和20年6月ごろ、犬上郡多賀町木曾の田んぼに飛行場をつくることになりました。多くの海軍の兵隊さんが、小学校の教室にとまりながら工事をしました。しかし、飛行場が完成する前に戦争は終わりました。

戦争が終わった翌日くらいに、木曾飛行場に一機の小さな飛行機が着陸しました。戦争から帰ってきた兵隊さんだったのではないかということですが、くわしいことはわかりません。飛行機が飛んできたので、地域の人たちは見物に出かけましたが、飛行機に乗った兵隊さんはいつの間にかどこかに飛び去っていきました。



◀ 木曾飛行場のあと。いまは田んぼが広がっている。

すごい飛行機がやってきた

八日市の西浦傳吉さん。まだ戦争が激しくないころの飛行場の話をしてくれた。

「そのころは、まだのんびりしたものでした。飛行場にすごい飛行機がきよったということで、見に行ったりしてね。88式偵察機やとか91式戦闘機は、すごい背面飛行をやっていましたからね。いまの国道421号線の北側は松林でね。すぐ、道をへだたてて飛行場になっていましたから、そこで見物してたんですね。」



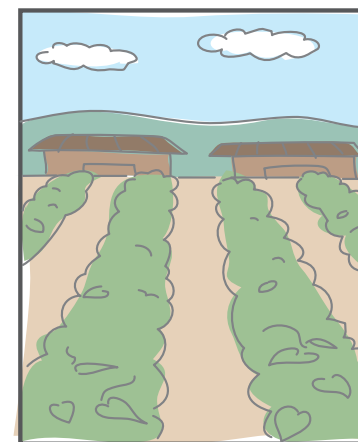
●さつまいも畑になった飛行場

安曇川町船木に広がる三角州に、滋賀県立びわ湖こどもの国があります。おじいちゃんやおばあちゃんのなかには、そのあたりを「飛行場」とよぶ人たちがいます。

船木飛行場は、大正11年、八日市飛行隊が高島郡饗庭野で訓練をする時に着陸する場所が必要だったのでつくられたといわれています。高島郡から3千5百人以上の人たちが飛行場の工事に参加して完成しましたが、戦争の終わりのころまであまり使われることはありませんでした。

昭和20年6月、海軍予科練習生がやってきて、グライダーの訓練が行われました。また、ロケットに人間が入って体当たり攻撃するための訓練も行われました。飛行場をねらった空襲もありました。

戦争が終わると、船木飛行場は地元の人たちによってさつまいも畑に生まれかわりました。



みんなは、飛行機に乗って旅行に行ったことがあるかな。沖縄や北海道、外国だって短い時間で行ける飛行機は、とっても便利な乗りものだよ。

だけど戦争になると、爆弾を落としたり、地上の様子を観察したりする飛行機は、おそろしい道具になる。そして、飛行場は飛行機が離着陸したりする大切な場所。戦争のないころにできた八日市飛行場のまわりでは、飛行機の絵がのっているおまんじゅうが売られていたし、子どもたちも飛行機を見るのが大好きだった。けれど、戦争が激しくなると、八日市の人たちにとって身近な場所だった飛行場にも近づくことさえできなくなってしまったんだ。船木飛行場は、戦争が終わる1年ほど前からよく使われるようになったし、木曾飛行場の工事は、戦争が終わる2カ月前に始まった。3つの飛行場は戦争が終わるとすがたを消してしまったけれど、戦争のために使われた場所がみんなのまわりにあったことを覚えておいてほしい。



窓の向こうのお父さん

余呉町のトミエさんが話してくれた60年前のこと。昭和17年、息子の清男くんが5歳、弟の晴海くんが3歳のときに、召集令状という通知がきて、軍隊に入るためにお父さんは出かけていった。やがて、戦地に出発するお父さんを乗せた列車が、中之郷の駅を通過する日がやってきた。連絡を受けたトミエさんは、子どもたちといっしょに駅に急いだ。停車時間は5分。お父さんは窓をあけてみんながやってくるのをまっていた。戦争が終わって、お父さんが帰ってくると信じて毎日駅を見ていたトミエさん。でも、やがて、お父さんは戦争が終わる1カ月前にサイパン島の北東の方向にあるウェーキ島で亡くなった、という知らせがとどいた。

余呉のおばあちゃんのお話

余呉町には、駅のプラットホームのあとがある。役場の前の道の向かいがわを見て、「中之郷」と書かれた案内板があるのですぐわかると思うよ。戦争中、余呉の人たちはここから列車に乗って出かけた、帰ってきたりした。でも、もどってくるのできなかった人もいたんだ。そのことを、3人のおばあちゃんが話してくれた。



左から谷口トミエさん、谷口タミエさん、橋本房江さん。3人のおばあちゃんは、とってもなかよしで、ときどき集まっておしゃべりをしたりしているんだって。

昭和12年、タミエさんの息子の宗一くんが1歳のとき、宗一くんのお父さんが中国との戦争に行くことになった。列車が中之郷駅を通過するのは、朝4時ごろ。まだ暗いなか、宗一くんはお母さんにおんぶされて、お父さんに会いに行った。それが、お父さんと会った最後だった。



案内板の裏に、駅があったころのできごとが書いてある。

中之郷のバスの待合室におかれている古いベンチ。中之郷駅にあったものだといわれている。

みんなが住んでいる近くには駅があるかな。もし、あったら、その駅は戦争のころからあるのか調べてみてほしい。建物が新しくなったり、場所が少し移動したりしているかもしれないけれど、戦争のころも同じ名前の駅があったなら、軍隊に入るために、戦争に行くために、その駅から列車に乗って出発した人たちがおおぜいいたと思うよ。余呉のおばあちゃんたちや藤一さんのような、出会いや別れがたくさんあったんだ。もちろん、元気に帰ってくる人たちもいたけれど、二度と帰ってくるのできなかった人たちもいた。兵隊さんになるために列車に乗ることなんて、いまはないよね。これからずっとそんなことがないようにしたいと強く思うよ。

ソラマメおくれ

房江さんは、息子の英隆くんがまだお腹にいるときのことを話してくれた。昭和19年、英隆くんのお父さんに召集令状がきた。戦地に出発する日や行く場所などは秘密だったから、お母さんの房江さんは、手紙に使う暗号をお父さんと決めた。「ソラマメおくれ」は「戦地に出発する」という意味だったんだ。

お父さんは、ビルマ（いまのミャンマー）に上陸するときに、機関銃で撃たれて亡くなった。

英隆くんのお父さんはこの鉛練比古神社へお参りして出発した。余呉から兵隊さんとして出発する人たちの多くはこの神社にお参りした。



知っているプラットホームは



お父さんはいませんか (米原駅)

愛知県愛知川町の坂井藤一さんが6年生になったばかりの昭和20年4月、お父さんが兵隊として召集されました。しばらくして、お父さんが戦地へ旅立つ日がやってきました。いっどこへ出発するのかが秘密でしたが、お父さんを乗せた列車が米原駅に到着する時こくを知った近所の人がお母さんに知らせてくれました。お父さんに会えるかどうかはわかりません。でも、お母さんと藤一さんは、米原駅のプラットホームでお父さんの名前を大声でよびました。



もらいそこねた牛乳 (守山駅)

昭和20年7月30日、小学5年生の宇野道雄さんが、守山駅で目撃したこと。

「その日、私は牛乳の配給をもらうために、守山駅の近くにある牧場でならんでいました。ならんでいるうちに、駅に汽車が着いて、兵隊さんがたくさん乗っているというので、駅に見に行きました。ちょうど、駅の改札で身乗り出した瞬間、機銃掃射がはじまったんです。突然、強烈な音がふってくるような気がしました。牛乳をもらうこともわすれて家に帰ったら、家の回りには縄がはられて家に入ることができませんでした。というのは、家のとなりが病院で、そこにケガをした人たちが運ばれてきていたからです。病院に入りきれない人たちは庭にもいて、苦しむ声が聞こえてきました。」

昭和20年7月30日、守山駅に停車中の列車が、グラマンとよばれるアメリカの戦闘機から機関銃による攻撃を受けた。3人が亡くなり、24人がケガをしたという。



みんなの願い



もどろきさんへの願いごと

大津市伊香立に還来神社があります。「もどろきじんじゃ」と読みます。なかには、「もどろきさん」とよぶ人たちもいます。「還来=かえってくる」という意味から、旅行に行く人たちが旅の安全をお願いする神社として知られています。

ふだんはお参りにくる人たちも少なく静かな神社です。でも、戦争のころは多くの人がお参りにやってきました。イチヨウの木のところにはお茶などを出す店もありました。お参りに来る人たちは、滋賀県の人たちはもちろん、京都、大阪、名古屋など遠くの人たちもたくさんいました。

兵隊として出発する前の人たちや、戦場にいる兵隊さんの家族もやってきました。みんなは「もどろきさん」に、戦場から生きて帰ってくることをお願いしたのです。



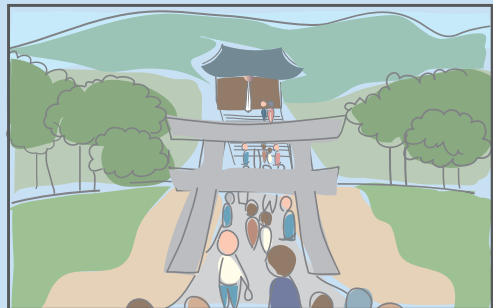
▲この赤い橋のむこうに見えるのが還来神社。



▲現在の還来神社。

長い長い列

還来神社の近くに住むおじいちゃん、おばあちゃんが戦争のころのことを教えてくれた。そのころは、江若鉄道の和邇駅がいちばん近い駅で、還来神社までは1時間くらいかかったけれど、長い長い人の列がずっと続いたことを、田中昭さんは覚えている。荒堀效治さんは、昭和14年、軍隊に入るときにお参りした。そして、お母さんは、效治さんが無事に帰ってきますようにとお祈りしたんだ。お母さんのおかげで無事に帰ることができたって效治さんは話してくれたよ。願いがかなって無事に戦争から帰ることができた人たちは還来神社へお礼のお参りにきたけれど、帰ることができない人もいたんだ。神社の社務所でお仕事をしていた田中初栄さんは、夕方、さいせん箱を社務所に持っていくとき、あるお母さんが大声で息子の無事をお願いしていたことを話してくれた。でも、そのお母さんの願いはかなわず息子さんは戦死してしまっただ。



湖からの出征

地域の男の人が軍隊に入るときには、列車やバスを利用することが多かったけれど、大津市堅田や高島郡今津町などでは、船で出発した兵隊さんもいたんだ。堅田港から見送ったおばあちゃんが、船はいつまでも顔が見えるから悲しかったって話してくれたよ。



◀現在の今津港。

現在の堅田港の棧橋。



◀いまは使われていない棧橋。戦争のころはこの場所から船に乗ったことを、今津町の中川賀津子さんが教えてくれた。賀津子さんが8歳のとき、昭和12年に始まった中国との戦争へ行くお兄さんを今津港から見送った。賀津子さんは、いろいろな色の紙テープが投げられて、とてもきれいだったことを覚えている。

なみだの見送り

大津市堅田の藤井清子さんが話してくれた堅田港からの見送りの様子。

「みんな、ここの人は伊豆神社によっておはらいして、堅田港から出征しましたね。うちの近所に住んではおはらいしたときのことはいまでも忘れられません。その人もうちの子と同じくらの生まれたての赤ちゃんをおいて行かれました。みんな棧橋まで送って行きました。その人は、下を向いてずっと泣いてはりました。船から泣いているのが見えまっしょろ。それを見て、見送りの私もずっと泣いてましたわ。」



▲現在の伊豆神社。



堅田港から「出征兵士」を見送っている。



戦争が始まると、多くの男の人たちには、召集令状という軍隊に入ること知らせる書類がきた。戦争に行く人たちのことを「出征兵士」といい、軍隊に入った人たちの多くは戦争をしている場所へいかなければならなかった。兵隊さんになることは名誉なこと、りっぱに戦うことが望まれた。近くの神社でおはらいをして、みんなに「バンザイ、バンザイ」って見送られ、列車やバス、船などで出発していった。だけど、勇ましく出かけた人だけじゃなかった。小さな子どもたちを残していかなければならない人など、なかにはお酒を飲んで酔わないと出発できない人たちもいたんだ。ほんとうは、「生きて帰りたい」「生きて帰ってきて」って心のなかでずっと願っていたと思うよ。だから、多くの人たちが還来神社へお参りに行ったんだね。地域では、千人針という弾があたらないことを願ってつくった布やお守りをわたしたり、のぼりをたてたりして兵隊さんになることをお祝いしたんだよ。滋賀県からは、のべ9万5千人以上の人たちが兵士として戦地へ行った。そして、3万2千人以上の人々が亡くなった。そして、それ以上の人たちがケガをして、なかには手足をなくしたり、目が見えなくなったりした人もいた。日本全体では、310万人以上の人たちが亡くなったといわれている。でも、それは日本だけに起こったことではないことを忘れないで。日本軍が戦った連合軍の兵士たち、そして戦場となったところで暮らしていた人々など、ほんとうにおおぜいの人々が亡くなったりケガをしたりした。いまでも、世界には、戦争が続いているところがたくさんあるよね。悲しみのなみだはずっと流れているんだと思う。

野田沼の捕虜収容所

野洲郡中主町の田中憲一さんは、琵琶湖の内湖のひとつ野田沼のほとりに住んでいました。昭和20年4月、野田沼に捕虜収容所ができて、田中さんは捕虜の人たちを見はる役につきました。

捕虜収容所には現在のインドネシアで日本軍の捕虜となった約160人ほどの人たちがいました。その多くはインドネシア人で、10人ほどがオランダ人でした。

食べものが不足していた日本ではお米などをたくさんつくるために、広い田畑が必要でした。そこで、滋賀県では琵琶湖の内湖の水をぬいて田畑にする干拓が行われました。捕虜の人たちも野田沼の干拓作業をしなければなりませんでした。



▲ 水はポンプでくみ上げてぬいていた。いまもポンプ小屋が残っている。



▲ 捕虜の人たちが使っていた井戸。

ミスタータナカ、クリスマスは母国でむかえるよ

美しいパラシュート

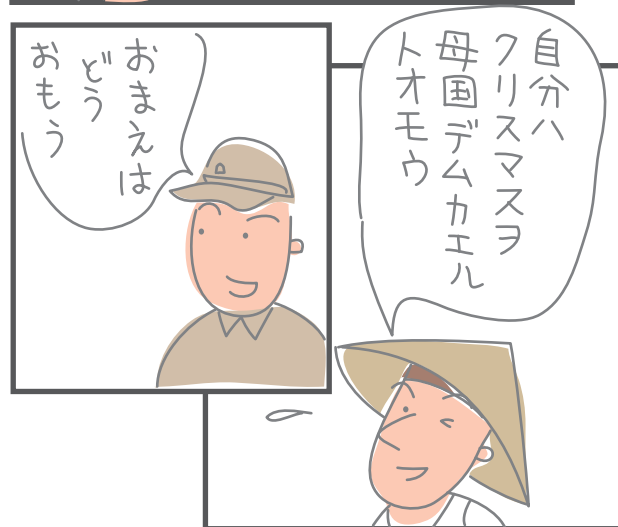
能登川町伊庭には、戦争の終わりごろ、金比羅神社のうらの方に捕虜収容所ができた。アメリカやイギリス、オーストラリアなどの人々が収容され、捕虜の人たちは伊庭内湖の干拓作業をしていた。

能登川西国民学校（いまの能登川西小学校）の6年生だった宮居伝二さんは、戦争が終わって、アメリカの大きな飛行機から赤や青のカラフルなパラシュート（落下傘）が落とされるのを見ていた。捕虜だった人たちのために、食料や衣類、毛布などが入ったハコをパラシュートにつけて落としていたんだ。

「一度に5、6この落下傘が落ちてくるのはとてもきれいだった。捕虜だった人たちの何人かが落下傘をひろいに走っていった。その人たちが子どもたちを集め、チョコレートやチューイングガムをくれた。当時のおやつはトマトやあられのようなものだったので、チョコレートはとてもめずらしかった。」と伝二さんは話してくれたよ。



このあたりに捕虜収容所があった。



『ガクセイ、寒イノウ』

米原の梅ヶ原にもアメリカやイギリスの人たちの捕虜収容所ができました。そして、捕虜の人たちは入江内湖の干拓作業をしていました。

長浜農学校（いまの長浜農業高等学校）の2年生だった若林重元さんが、入江内湖の干拓作業に出かけたときのごとです。

捕虜の人たちの宿舎は地面を水が流れるので高床式になっていて、床にワラをしいて暮らしていました。作業をしている重元さんが、捕虜の人たちの近くにいったときのことです。背の高い捕虜の一人が重元さんに向かって「ガクセイ、寒イノウ」と日本語で話かけました。重元さんは少しわかったそうです。



オランダ人との不思議な交流

田中さんは、すこし英語を話すことができた。それを知った捕虜の人たちは田中さんに話かけるようになった。こうして敵同士である捕虜の人たちと田中さんの交流が始まったんだ。

ある日、その一人から田中さんは「戦争はいつ終わると思う」とたずねられた。

まもなく戦争は終わった。8月の終わり、大きなバスが捕虜だった人たちをむかえにきた。田中さんは村人のなかでただ一人そのバスに乗って、野洲駅まで行き、捕虜の人たちにさよならしたんだ。

戦争では、かならず捕虜になる人たちがいる。捕虜（戦争のころは俘虜とよばれていた）ってわかるかな。敵につかまえられた人たちのことだよ。とくに戦争に負けた日本軍には、戦争が終わって捕虜になった兵隊さんなどがあおぜいいた。日本が戦ったアメリカやイギリス、オランダなどの連合軍や、それらの国が支配していたアジアなどの国々の兵隊さんや一般の人たちのなかには、日本軍の捕虜になった人たちが多くいる。約3万2千人の人たちが日本国内の捕虜収容所にいたという記録があるくらいだ。

そのうち700人近い人たちが滋賀県の3カ所の捕虜収容所にいた。そして、捕虜の人たちは、琵琶湖の内湖の干拓作業などをしていたんだ。そこにはいつも捕虜を見はる人たちがいた。なかには捕虜の人たちをいじめる人もいて、戦争が終わったときの裁判で罰を受けた人もいる。田中さんのように、捕虜の人たちとなかよくなる人もいたけれど、それは不思議なことだよ。だって捕虜の人たちとその見はりの人がなかよくなるということは、敵同士がなかよくなるってことだもの。みんながなかよくなれば、戦争なんか起きないのになって、思うんだ。

琵琶湖の干拓

滋賀県には琵琶湖とつながっている内湖があるよね。内湖にはヨシなどのいろいろな水草がしげっていて、それらは、川から流れてくるよごれをきれいにするはたらきをしてくれるし、魚や貝類の産卵場にもなっている。琵琶湖のゆたかな自然が感じられるところだよ。むかしは、もっとたくさん内湖があったんだよ。

でも、戦争が長びいて、食べものが不足してきた日本ではお米などをたくさんつくることを国が進めたんだ。それを食糧増産といった。食糧増産のためには、広い田畑が必要だから、滋賀県では琵琶湖の内湖の水をぬいて田畑にする干拓が行われた。そして、中学生（いまの中学生や高校生）も作業に参加した。干拓作業は戦後もしばらく続いたんだ。

干拓ってどんなことをするのか？内湖で作業した神崎商業学校（いまの八日市高等学校）に通っていた神崎能登川町の辻照三さんと、膳所中等学校（いまの膳所高等学校）に通っていた大津市の結城稔雄さんが教えてくれたよ。

辻さんのお話

内湖を干拓するために、承水路という川をほるんです。そして水を外に出して、そこを干上がらして田んぼにするんです。私が作業にかかわったのは、現在近江高校や彦根のグラウンドになっているあたりです。承水路はいまも残っています。雑草が生えていますけど、それが承水路です。

結城さんのお話

琵琶湖の入江のところに堤防をつくって、琵琶湖の水が入ってこんようにして、ポンプで水をかい出した。田んぼをつくる計画やったからね。私らの学校だけじゃなくて、いろいろな学校からやってきました。捕虜もきてはりました。

『明治三十年式直立円筒上方差入下方引出郵便箱』は???



八日市市の川越孝一さんが話してくれたなぞの物体のこと。

「その時分は、英語は敵国語やちゅうことで、中学3年生になるとほとんど習っていませんわ。干拓に行ったときも、『えんぴ、えんぴ』てなんのことやるなと思ったら、円匙と書くんですね。それがスコップのことでしたな。」

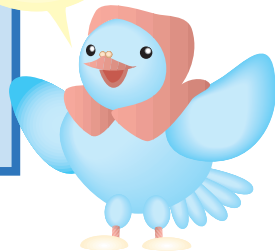
川越さんがもうひとつ教えてくれたものに「明治三十年式直立円筒上方差入下方引出郵便箱」があるんだけど、これってわかるかな？

答えは、ほかのページをさがしてみてね



▲能登川町伊庭にある膳所中等学校干拓生徒の碑。

なにかな？



学校の授業がなくなつた

古い建物のナゾ

大津市堅田の東洋紡総合研究所のなかに、古い建物があります。それは、戦争が始まる前から使われていた診療所の建物です。戦争のころ、現在東洋紡総合研究所がある場所には、住友金属の工場がありました。そこでは中学生や女学生（いまの中学生や高校生）も働いていました。そのころ、多くの学校では授業がなくなって、生徒たちは工場などで働かなければなりませんでした。



▲東洋紡総合研究所の診療所

昭和20年、高島郡今津町の中川賀津子さんは、藤樹高等女学校（いまの高島高等学校）の2年生でした。2月の終わり、学校のみなは、堅田の住友金属の工場へ働きにいかねばなりませんでした。雪のなか、今津を出発しました。寮で生活しながら仕事をする毎日でした。仕事は、金属の部品をヤスリでみがくことでした。1カ月くらいたったある日、賀津子さんはおなががいたくて一晩中苦しみました。次の朝、先生が診療所に連れていってくれました。

廊下でまわたづくり

甲賀郡水口町の上村清子さんは、昭和19年4月、水口高等女学校（いまの水口高等学校）の5年生になりました。しかし、学校の授業はなくなって、軍隊のパラシュートの材料になる真綿づくりをしなねばなりませんでした。まず、1、2年生が大なべでかいこのマユをたきました。清子さんたち上級生は、そのマユをひきのばして真綿をつくりました。じょうぶで軽い真綿は、パラシュートにぴったりだったのです。真綿づくりは、廊下にならべたタライを使ってやりました。冬、タライの水はとても冷たく寒さにふるえながら作業をしました。一日中真綿をつくる清子さんたちのために、先生はオペラ「カルメン」の曲など世界の名曲のレコードをかけてくれました。



みんなには中学生や高校生のお兄さん、お姉さんがいるかな。遠くまで友だちと出かけたり、おしゃれをしたり、小学生のころより少し自由にさせてもらえるお兄さんやお姉さんはいいなあって思ったことがあるんじゃないかな？

でも戦争のころには、お兄さんやお姉さんに自由な時間はなかった。20代30代の男の人の多くが戦争に行ったために、働く人が少なくなったから、中学生や女学生（いまの中学生や高校生）が働かなければならなくなったんだ。学校の授業の時間はどんどんなくなって、かわりに武器などをつくる工場などで働いたり、琵琶湖の干拓などをしたりした。それを「学徒勤労動員」というんだ。全国では、約340万人の人たちが動員されたといわれている。武器などをつくる工場はよく空襲されたから、亡くなったりケガをしたりした人もたくさんいた。家族と離れて生活しながら、毎日働くお兄さんやお姉さんたち。「勉強したい」と思ってもできなかった、そんなことが戦争のころにはあったということ覚えておいてほしいな。



● 何のためのあな

大津市滋賀里に「崇福寺跡」という歴史的なお寺のあとが残されているのを知っているかな。その近くに大きなあながあるんだ。そのあなは、昭和20年の春ごろから大津海軍航空隊（大津空）の人たちが掘ったものなんだ。全部で7, 8カ所のあなを掘って、そのうち2カ所はトンネルのようにつながれた。そのあなはいったい何のために掘ったんだろう。

大津空で飛行機の整備を教えていた大津市の中西栄太郎さんは、大津空の人たちを引率してあな掘りの作業をした。その中西さんに何のためのあなかを聞いてみた。

「私たちはそのあなを防空壕とよんでいた。アメリカ軍が、日本に上陸したときには、多くの兵隊は和歌山県田辺市まで移動することになっていたが、大津空に残った兵隊のための防空壕ではないかなあ。」と中西さんは考えている。

大津の飛行学校

大津には、海軍のパイロットになるための訓練をする航空隊がありました。「大津空」とよばれていた大津海軍航空隊と「滋賀空」とよばれていた滋賀海軍航空隊です。「大津空」では、「赤トンボ」とよばれる水上飛行機などで訓練が行われました。そして、戦争が終わる少し前には、大津特別攻撃隊という敵の飛行機に体当たり攻撃するグループがつけられ、本当にアメリカ軍の飛行機への体当たり攻撃が行われたそうです。この2つの航空隊をつくるためには、広い土地が必要でした。そのため、土地の持ち主は、海軍がいうとおりの値段で土地を売らなければなりません。もちろん、ことわることはできませんでした。

また、大津には大津陸軍少年飛行兵学校がありました。14歳、15歳の少年たちが、グライダーなどで、パイロットになるための基礎的な訓練を受けました。そして、昭和19年6月からは、大津市内の中学校の生徒への飛行訓練も行われるようになりました。



▲少年飛行兵学校があった場所には現在、大津商業高等学校がある。



▲大津陸軍少年飛行兵学校の訓練の様子。

山のなかの大きなあな

あこがれの「テントラ」

大津市には、昭和10年にできた民間のパイロットを訓練する「天虎飛行研究所」がありました。大津の人たちは親しみをこめて「テントラ」とよんでいました。子どものころから飛行機にあこがれ、パイロットになることを夢見ていた大津市の佐藤生寿さんは、16歳のとき、できたばかりの「テントラ」のスタッフになりました。当時は、琵琶湖岸にはクラブハウスがつけられ、観光のための遊覧飛行も行われていたそうです。でも、戦争が激しくなると、「テントラ」では、京阪神の大学生などが海軍航空隊のパイロットになるための訓練が行われるようになりました。「戦争が終わる前には、爆弾を積んだ飛行機や船で体当たり攻撃する特攻（特別攻撃）訓練が行われるようになり、天虎血盟特攻隊と名前がつけられて、9月に出击するという話が伝わってきた」と佐藤さんは話してくれました。



● 特攻機を運んだ比叡山のケーブルカー

みんなはケーブルカーを利用して比叡山に登ったことがあるかな。人を乗せるケーブルカーだけど、戦争の終わりのころには、別のものを乗せていたんだ。

昭和20年6月、滋賀海軍航空隊（滋賀空）の隊員たちが比叡山の山頂で工事を始めた。山を切り開いて飛行機の発射台をつくる工事だった。発射されるのは、「桜花」と名付けられていた敵の艦隊に体当たりをするための特攻機で、新たに編成された特攻隊が飛び立つことになっていた。「桜花」は体当たりをするために飛んで行く飛行機だから、着陸はできなかったんだ。そんな飛行機に乗る人は、どんな気持ちだったろうね。

「桜花」を運びやすいように分解し、ケーブルカーで山頂まで運んで、そこで組み立てた。カタパルトという発射台の完成予定は8月15日だった。でも、その日、日本は終戦を迎えたので、比叡山から特攻機が発射されることはなかったんだ。



◀飛行機の胴体（どうたい）を乗せるために、車のワグ（わが）がはずされてほとんど台車（たいしゃ）だけになったケーブルカー。



▲発射台（はつせつだい）がつけられた比叡山（ひえいさん）の山の上。



▲発射台（はつせつだい）の付近（きん）からのながめ。

「アメリカ軍の日本上陸」ってどういうことかわかるかな？
中国、東南アジア、太平洋と広い地域が戦場になったけれど、日本軍はゆたかな物資に恵まれたアメリカ軍につぎつぎと負けていった。そして、昭和20年4月、アメリカ軍はとうとう沖縄へ上陸したんだ。自分たちが暮らす地域が戦場になって、砲弾（はうだん）が飛びかう場所になってしまう。約3カ月続いた戦いで、約9万人の日本軍の兵士が亡くなり、アメリカ軍の兵士も1万人以上亡くなった。そして、約9万人の沖縄の人たちも亡くなった。アメリカ軍が日本に上陸するというのは、日本が戦場になるということだったんだ。15歳から60歳の男の人と17歳から40歳の女の人全員がアメリカ軍と戦う兵士になるという法律（はうりつ）ができた。そして、日本にやってくるアメリカ軍に対して、爆弾（ばくだん）を積んだ飛行機や船で体当たり攻撃（たいあたりこうげき）（特攻）をしようと考えた。比叡山（ひえいさん）から発射しようとした「桜花（おうか）」もそのひとつだったんだ。また、武器（ぶき）が少ないから、女の人には竹やり（たけやり）で攻撃（こうげき）させようと考えて、竹やりでわら人形（わらにんぎょう）をつきさす訓練（くんれん）をしたりした。人間の命（いのち）をまったく大切にしないのが戦争（せんそう）だということがよくわかるよね。日本にはそういう時代（じだい）が確かにあったということ、そして、世界にはいまなお戦争（せんそう）が続いているということを考えてみて。

なんでも食べたんだ

彦根市の上野欽一さんが小学2年生のころのことを話してくれました。

欽一さんは、学校からドングリをひろいに行きました。学校の製粉機で粉にして、それでパンが作られました。でも、欽一さんは、苦くておなかがすいていても食べることができませんでした。米ぬかパンもありましたが、これは、からくて一口二口食べるのがやっとでした。

食べるものがとても不足していたので、かぼちゃの葉っぱも野草も食べました。また、彦根城の土のいや石垣の上のせまい空き地にも野菜をつくったりしました。欽一さんはいまでもそのことを覚えています。

欽一さんの日記

昭和18年、欽一さんは、彦根市の城西国民学校（いまの城西小学校）の2年生でした。1年生のときは男の子も女の子もいるクラスでしたが、2年生からは、男の子のクラスと女の子のクラスにわけられました。欽一さんは2年生の6月から2月まで、毎日「絵日記」をつけるようになりました。



町内の防空演習の見学に行った欽一さん。どのおばさんも上手に水をかけていたからお母さんもがんばって書いている。



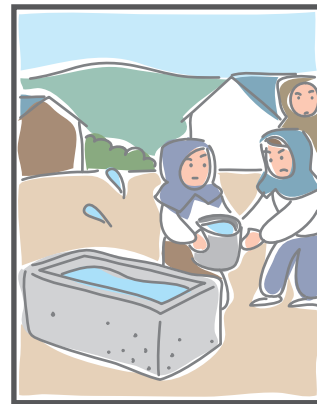
兵隊さんに行くおじさんを欽一さんは「ばんざい、ばんざい」と書いて見送ったと書いている。

にがいとんぐりパン

防火用水とかかれた箱をさがしてみよう

戦争が激しくなると、空襲があったときのために逃げる訓練や、火を消す訓練、ケガをした人を手当てする訓練もあった。それを防空演習といい、女の子たちが中心となって行う訓練だったけれど、参加しないことは許されなかった。火を消す訓練では、防火用水という水の入った箱からバケツで水をリレーしたりしていたけれど、ほんとうの空襲にはほとんど役に立たなかった。

いまでも「防火用水」とか「用水」と書かれた箱を見つけることができるよ。みんなのまわりにないかさがしてみよう。見つかったら、それは戦争のころからあったかもしれないよ。どんなふうにして使っていたのか、くわしいことを近所のおじいちゃんやおばあちゃんに聞いてみて。



いまでも見かける用水と書かれた箱。

全国のみなさまにお願いします。牛さまの居場所を教えてください。

神崎郡五箇荘町金堂の大城神社の境内には、「お牛さん」という地域の人たちがとても大切にしている青銅でできた牛の像がありました。

長い長い戦争のために、鉄砲や弾などをつくる金属が不足し、金属でできたものを国に出さなければならなくなりました。それを「金属供出」といいます。

雄牛と雌牛の2体の「お牛さん」がいましたが、まず雄牛が供出されました。地域の人たちはなんとか雌牛だけは残しておきたいと願ったのですが、願いはかたがたありませんでした。昭和19年2月、兵隊さんと同じように、地域の人たちが全員で「お牛さん」を見送ったそうです。

戦争が終わって5年後、金堂の人たちはラジオを通して「牛様の居場所を教えてください」とよびかけました。しかし、「お牛さん」は金堂にはもどってきませんでした。



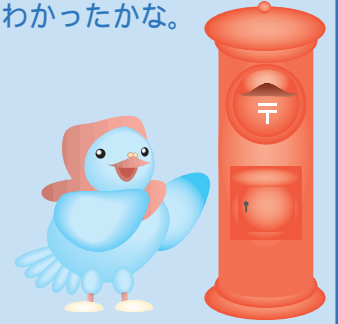
いまある金堂の雄牛像。戦争が終わって10年後に奉納された。その後、雌牛像も奉納された。

戦争をするためには、戦場で戦うだけではなく、兵隊さんに必要なものをたくさんつくらなければならなかった。大人も子どもも、戦争のためには何でも協力しなければならなかったし、戦争に勝つまではなにもかもがまんしなければならなかった。

どんなに用事があっても、防空演習など地域の集まりには、必ず参加しなければならなかった。食べるものが少なくなると、土手や学校の運動場などあいているところを畑にした。それでも服やくつ、ノートやえんぴつなど、生活に必要なすべてのものが不足していった。そして、武器などをつくるために、おナベやスプーンなど身の回りの金属製品も国に出さなければならなかった。だけど、どんぐりや米ぬかでパンをつくったり、金属のかわりに、焼きものでおナベをつくったり、竹でスプーンをつくったりするなど、みんなはいろいろなくふうをして暮らしていたんだ。このように戦場での戦いをささえる社会を「銃後」といったんだ。

P14の答え

「明治三十年式直立円筒上方差入下方引出郵便箱」は郵便ポストのことでした。みんなわかったかな。



終わりが始まりだった!

● みんなでおどった江州音頭

夏休みには、みんな盆踊りにいく? 滋賀県といえば「ヨイトヨイヤマカドッコイサノセ」というのはやし言葉の江州音頭だね。でも、戦争が激しくなると、みんなが楽しみにしていた盆踊りもできなくなった。犬上郡豊郷町に千樹寺というお寺がある。住職のお母さんの藤野知子さんは「私がここへお嫁にきたのは昭和22年。でもその前の年の8月17日には、みんなで盆踊りをしていたそうですよ。それから、毎年とてもにぎやかでしたよ。」と話してくれた。戦争が終わって、ようやく盆踊りが復活した。みんなは、どんな気持ちで江州音頭をおどったんだろうね。



歌はみんなを元気にしてくれた

戦争中、天津市に暮らす音楽好きの人たちが集まって合唱団をつくった。やがて長い戦争は終わったけれど、子どもたちの回りには、おもちゃやおかしなどはほとんどなかった。そこで、合唱団の人たちは、音楽で子どもたちをはげまそうと考へた。戦争が終わった2カ月後の10月から、合唱団は、土山、堅田、今津、豊郷の各小学校を回って、子どもたちが大好きな童謡などを歌った。合唱団のメンバーだった天津市の下村利治さんが、その時のことを話してくれた。

「合唱団のメンバーは30人くらいでした。大学生もいました。食べるものも着るものも不足していたころでした。だけど、音楽には何もいらないうでしょう。だから、終戦の年の10月から、始めることができました。小学校の講堂で唱歌や童謡、たとえば『ふるさと』などを歌いました。子どもらはとても喜んでいました。」

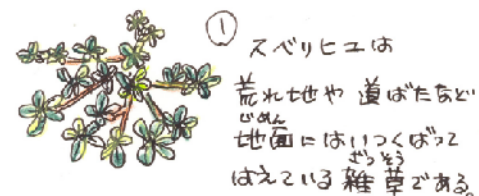
● 終戦の缶詰



八日市市の高木フミさんは、戦争が終わったときには、鎌掛村(いまの蒲生郡白野町)で暮らしていた。戦争が終わってしばらくしたころのこと。鎌掛村の軍隊の倉庫には、サンマやイワシの缶詰などがたくさん入っていた。それを地域の人たちに配ったんだ。そのころは、お魚なんてめったに手に入らなかったから、おばあちゃんたちが「戦争が終わって、こんなごちそうがあってよかったな」と話していたとフミさんが教えてくれた。

● 草を食べていた中島くん

八日市市の中島伸男さんは、戦争が終わったとき、小学5年生だった。戦争中も食べものが不足していたけれど、戦争が終わると、食べものはますます少なくなって、お父さんと一緒に道ばたで草をつんで料理した話を絵にしてくれたよ。



おいもでがまきせる。

⑤ おちゃわんに盛りあげせる。

スベリヒユにごはんついでにまぜておく。

ゆるゆるにとろとろのお腹がすいていてもおいしいと思わなかった。



雑草を食べて悲しい思い出

私が小学校(そのころは国民学校)5年生のとき、日本は戦争にまけました。それまで少し少なかったお米の配給がますます少なくなりました。1人1日1.8合(0.33Q)に減りました。お金のある人は闇米を買って食べましたが、私の家では父が敗戦の結果、失業して闇米はもちろん、野菜すら買うことができませんでした。もちろん、おやつも買うことができません。お米が少なくて、お米の中に道ばたに生えている雑草を父とつんできて、食べました。タンポポ、ギンギン、ツユクサ、アカザ、エノコログサ(根を取って)、カンゾウなどいろいろあります。なかでも忘れられないのがスベリヒユの混ぜごはんです。ゆるゆるにとろとろ、いくらお腹がへついても「おいしい」と思ってたべることはできませんでした。

戦争が終わったことを知ったとき、みんなはどんな気持ちだったんだろう。おじいちゃん、おばあちゃんがそのときの気持ちを話してくれた。「ただただ情けなかった。ほんと、悔しかった。」「負けたとわかってなんとも思わなかったわ。」「電気が自由につけられるのがうれしかったような気がしますね。」「母親が『あにいが兵隊に行かなくてもええ』と喜ばはったわ。わしも、ああもう予科練行かなくてもええわい」といっばんにそう思った。」などなど、いろいろな気持ちや思いがあったことがわかるよね。

戦争に負けた日本には、アメリカを中心とした連合軍軍がやってきて、日本の軍隊を解散させたり、戦争を進めた指導者を裁判にかけたりした。二度と戦争はしないと決めた憲法もできた。世の中は急激に変わって、とまどう人も多かったと思うよ。でも、戦争で命を失ったり、戦争のためにがまんしたりすることはなくなった。食べものや生活に必要なものは不足していたけれど、まちも人も少しずつ元気を取りもどしていったんだ。

滋賀県と戦争<地図>

滋賀県にあったおもな軍事施設と空襲の被害があった地域です。
 昭和20年5月からは、軍事施設や武器などをつくる工場（軍需工場といいます）を中心にたびたび空襲があり、40人以上が亡くなり、180人以上の人たちがケガをしました。



くわしゅう ひがい 空襲の被害 (昭和20年)

- 5月14日 守山市・中主町などで焼夷弾が落とされる。信楽町と甲南町での機銃掃射で、3人がケガをした。彦根市の旭森国民学校（いまの旭森小学校）付近で機銃掃射があった。小学生5人がケガをした。
- 5月17日 彦根市内に焼夷弾が落とされる。
- 6月26日 彦根市の福満国民学校（いまの城南小学校）付近に爆弾が落とされる。6人が亡くなり、12人がケガをした。（杉本功仁子さんの体験）
- 7月24日 大津市の東洋レーヨンへ爆弾が落とされる。16人が亡くなり、13人が大ケガをした。（池田廣さんの体験）八日市飛行場付近に爆弾が落とされる。また、機銃掃射される。2人が亡くなり、数人がケガをした。
- 7月25日 彦根市の近江航空・鐘紡などに爆弾が落とされる。彦根市内を通過中の近江鉄道の電車へ機銃掃射があり、6人が亡くなり、35人がケガをした。八日市市内に爆弾が落とされ、2人が亡くなった。
- 7月28日 彦根市の近江航空、鐘紡に爆弾・焼夷弾が落とされる。また、機銃掃射される。
- 7月30日 守山駅の列車への機銃掃射で、3人が亡くなり、24人がケガをした。（宇野道雄さんの体験）彦根市内に爆弾が落とされる。また、機銃掃射され、2人がケガをした。能登川町の日清紡に爆弾が落とされる。また、機銃掃射され、1人が亡くなり、1人がケガをした。大津陸軍少年飛行兵学校に爆弾が落とされる。1人が亡くなった。滋賀海軍航空隊に爆弾が落とされる。永源寺町内で機銃掃射があり、山田久司さんと弟の忠男くんが亡くなった。
- 7月31日 彦根市と豊郷町に爆弾が落とされる。
- 8月6日 長浜市の鐘紡に爆弾が落とされ、1人が亡くなり、1人がケガをした。

さがしてみよう、滋賀県の戦争のこと

キミたちは、60年ほど前の戦争のことを学校で勉強したり、本やテレビで見たりして、少しは知っていると思います。飛行機から爆弾や原爆を落としたり、まちが燃えたり、船が沈んだり、おおぜいの兵隊さんや、大人や子どもが犠牲になった、あの戦争です。

でも、教科書や本やテレビに出てくる戦争のこのなかに、滋賀県のことほとんど出てきません。滋賀県は、戦争とはあまり関係がなかったのでしょうか？

そんなことはなかった、いろんなできごとがあったんだということが、この本を読んでわかったと思います。こうしたできごとの多くは、いま滋賀県に住んでいる多くの人たちの胸のなかにしまいこまれています。それは悲しく、苦しい思い出がほとんどです。

でも、60年ほど前に滋賀県でいったい何があったのかを知っておくことは、いま滋賀県で暮らすキミたちにとって、大切なことではないでしょうか。なぜなら、それは滋賀県であったことなので、私たちがそれを知らなければ、世界のだれもそれを知らずに、消えてしまうからです。これは、たとえば美しい琵琶湖を守ることと同じくらい大切なことではないでしょうか。

この本に書かれていることは、その当時、滋賀県であったできごとのほんの一部にすぎません。もっと私たちの知らないことがあったと思います。キミたちも、こうしたできごとをさがして、私たちに教えてください。それは、平和祈念館づくりに、きっと役にたちます。

さがすときのアドバイスをひとつ。「戦争」というと、おもわず爆弾や大砲、戦車、戦闘機などを思ってしまう。でもほんとうは、できごとのなかには、からなず「人」がいます。人が爆弾を落とし、人が犠牲になります。ですから、戦争のなかの「人」の気持ちを想像することが大切です。

こう考えると戦争がもっときらいになりませんか？そして、いま世界で起きている戦争のことが心でもっと感じられるでしょう。

あの日、あの時、滋賀県であったできごととそこにいた人たちのことを考えて、私たちはもっと平和を願う人間になりましょう。

平和祈念館はまだ仮の名前です。

まずどこからはじめればいいのか？

いろんな方法があるよ
たとえば

インタビューしてみる方法

おじいさんやおばあさんに、むかしのことをきいてみよう。
(子どもの時の写真なんかみせてもらおうとお話がわかりやすいよ)
近所の人に、なにか知っていることがあったらおしえてください、というアンケートをしてみるのもいいかもしれないね。

アンケートをしてみる方法

資料をさがしてみる方法

図書館や資料館でしらべてみよう。
・図書館でむかしのことをしらべてみて、そのなかにキミたちの地域のことが書いてないかみてみよう。
・資料館になにか資料がないか(むかしの地図でもいいよ)しらべてみたり、資料館の人にきいてみよう。
とにかく歩いてみよう。
・地域を歩いて、記念碑なんかをさがし、近所の人にそのいわれをきいてみよう。

調べたあとはどうするの？

「記録」をつくろう

みんなで手わけして、「記録集」をつくってみよう。
「記録集」は、写真や絵、地図、文章で自由につくっていいけれど、その時に自分が感じたことを記録しておくことがたいせつだよ。

<協力>
東洋紡績株式会社 総合研究所 湖族の郷資料館

<写真提供>
尾形重男 佐藤生寿 山田順一
比叡山鉄道株式会社 共同通信社 財団法人 大阪国際平和センター(ピースおおさか) 大津市
(敬称略 順不同)

滋賀県と戦争のことをもっと知りたかったら
「バーチャル平和祈念館」というホームページをみてみよう
<http://www.pref.shiga.jp/heiwa/>
Eメール ea00@pref.shiga.jp

わからないことや相談したいことがあったら電話してみよう

滋賀県健康福祉部健康福祉政策課
(077)528-3514

地域にみる滋賀県民の戦争体験
戦争なんか大キライ2

平成15年3月発行
編集・発行 滋賀県健康福祉部健康福祉政策課
〒520-8577 大津市京町四丁目1-1
企画・編集協力(株)シー・ディー・アイ
デザイン 川添佐代子